



戀坂

斎藤エリカ

私のお父様とお母様のお話を聞いてください。公の新聞に私信のような文章を認めるのは気が引けるのですが私は何かの形として美しい私の父と母の話を物語として残しておきたいと思ったのです。こちらの文章が掲載されるのか否かは私にはわかりかねますけれども、しかし一心に私の心の整理をつけるためにどうしてもこの話を書ききらなくては成らないのです。

私の父と母が果たして父として母として適正な人格の持ち主だったかどうかは私には疑問でございました。今でも私の生家の居間に飾ってある父と母がおそらく結婚した直後の写真を見ると私の父と母はあくまでも一对の番であり決して人を育てるために生まれた高潔な人物ではなかったことがうかがい知れます。しかしいえ、私は決して父母を恨んでいるわけではございません。あれ以上に愛し合った一組の夫婦を私は見たことも噂に聞いたこともないのでございます。

父、飯野喜一は先の戦争に指揮官として当った時既に歳三十五を超えていたと記憶しております。父の歴史には後々触れますが彼は軍人でした。陸軍大学校を好成績で卒業したのち前線に立ちその後怪我を負ったことと才を見込まれ指令へ。母と出会ったのがどの頃かは定かではありませんが、おそらく母の口ぶりからするとまだ前線に立っていた頃から母と父は顔の見知りがあったのだと思います。私が生まれしばらくした時には父はもう陸軍のどこだかの部隊の司令官を務めていました。

母のことを父はいつも「鞠、鞠」と親わしげに呼んでいました。時折酔った時などは母のことを「小鞠」と呼び、私はその子供に呼びかけるような音が少しばかり気持ち悪くでも少しばかり好きでした。私はすっかり母の名を「飯野鞠」だか「飯野鞠子」だかそんな名だと思い込んでいたのですしかしながら後に私が結婚する時に戸籍謄本を見ましたところ、続き柄、母の欄には違う名がございました。私の母の名前は京子。実を言えばこの母の名前の違いを知ったのが私が父と母の出会いと人生を探る切っ掛けとなりましたことは否めません。もともと浮世離れした小説の中のような二人でしたから一体何が起こっても私は驚きませんでしたけれど。

その、鞠と呼ばれていた母は決して奔放な人ではありませんでした。極めて軍人の妻らしい貞淑な人で決して艶やかな美女というわけではありませんでしたが当時の女性としてはとても目が大きく小ぶりの鼻と口を持つ色白な小柄な童顔の女性でした。私の中で母は子供のような人という印象です。滅多に表情を動かさない父の代わりに母はよく笑う人でした。器量も悪くなくなんでもそつなくこなす華道や茶道などの教養も深く読み書き学問にもかなり明るい人だった一方で子供のようなおもちゃが大好きでビイドロだとかブリキの兎だとかを後生大事にしておりました。しかしながら気も強く軍人氣質の父に全く怖気付かないところは不思議な人でした。私はそんな母が好きでした。こんな風になりたいと思っていました。

私が飯野の姓を離れ主人のもとに嫁いで以降私は方々を回り父と母について調べました。もしかすると私のこの行為は父と母が築き上げた幻想の楼閣を崩す行為に他ならないことなのかもしれませんが私にとって父と母の世界とはその二人のうちに閉じ込めておくには勿体無いものなのでありました。母が幼少期を過ごした場所、父のこと、本当はいけないのでしょうか父と母のかわした恋文も覗き見ました。その端々から一体父と母は何で結びつきどう生きてきたのか娘の私にもようやくわかったのでございます。そしてそれは余りにも私一人の胸の内にとどめておくには大きい数奇なる物語だったのです。

父、喜一が生まれたのは決して裕福ではない教師の家でした。私にとって祖母にあたる飯野家

はどちらかという文学や芸術を愛する家系のおそらく父が飯野家で初めての軍人だったのだと思います。決してしっかりとした御家柄ではありませんから記録は残っておりませんが私の記憶の限り祖父母にお目にかかったことはございません。つまりおそらく父と祖父母は縁が切れていたのだと思います。家にも私信ひとつ見つかりませんでした。

一方母はどうやら西の都生まれのようです。おそらくこのことは母も知らず——つまり私にとっては母も知らぬ母の素性を探るようで少しばかり気が引けたのですが——何があったのかという母の生家から放り出されているのです。母の本当の苗字は実在する御家柄の同じもの、実名は影響が出るので文章にするのは差し控えますがとにかくそのようなものでした。おそらく母はそのお家の当主の隠し子が何らかの後ろ暗い原因を伴って生まれてきた子供だったのでしょう。彼女は生まれてすぐに有名な花街の高級遊郭に売られておりました。

さて先だって母の名は京子だったと申し上げましたがこれは決して私のお母様が別の方だったと言うわけでは御座いませんでした。鞠は母の源氏名だったのです。

実を言うと母が私の実母であるとわかっただけで私の調べはことをなしました。しかしながらどうして軍人と一介の遊女が出会い一時代を生き延び支え合い生きていくことがこの世界にあるでしょう。もしよろしければもう少しばかり私の好奇心にお付き合いくださいましたら幸いです。記録を辿れば彼らの奇譚はかなり詳になりますゆえに。

母は、遊郭の中ではかなり長い間かむろとして高位の遊女の世話を焼いていたそうです。私は花街の最盛期を存じ上げませんから詳しいことはわかりかねますがどうやらこのかむろという役職はある年になるまでは客を取らず芸などを仕込まれるようです。鞠という名を貰って以降彼女は最初「引込みかむろ」と呼ばれる階級に属していたらしく、これはかむろとはまた違い遊郭の奥の奥で花魁の世話も焼かずに将来のためひたすら芸妓を仕込まれるいわゆる最上位の花魁候補です。しかしながら母は琵琶三味線などの和楽器が恐ろしく下手くそでした。私の記憶の中でも母は三味線をまともに弾けていなかったと思います。ぺたんぺたんとは珍妙な調子外れな音を出してはそれを肴に呑む父が「稚児よりひどい三味線だ」とからかい薄らと笑っていたのが思い出されます。

話が逸れましたが母は夕霧と呼ばれる高位の遊女の御付きとして幼い頃から働いておりました。定かでなかったのは父と母の出会いについてです。もちろん文言が残っているわけでもございませんが当時の吉原の台帳には父の晩年まで交流があった直属の上司の方のお名前と夕霧太夫の名前が書いてありました。おそらく父はその上司の方に連れられ吉原へ行ったのでしょう。当時父は二十代も後半母は未だ十三だかそこらの年齢でした。

「夕霧付きのかむろの娘に会いたい」と進言したのはどうやら父でした。もちろんかむろというのは未だ売り物では御座いませんから客をとっていたわけではなく店は父の願い出を拒否したと店番台帳には記してあります。しかし父は何度も通いつめ最後は夕霧経由で無理を利かせて鞠との面会を果たしたのです。

ここからは私の憶測に過ぎませんがおそらく父は夕霧の花魁道中に付き従う母を見初めたのでしょう。豪華絢爛に着飾った花魁その人ではなく花魁の後ろを三步下がってついていく少女に目がいく父は確かにそんな人でした。父が若い女性を好きになる人間だったとは到底思いませんしおそらくそこには将来を確信するような父の直感的な閃きが存在したのかもしれませんが一目惚れというのでしょうか。それとも母に備わる内なる何かに惹かれたのでしょうかしかしその直感だけでおそらく父と母は生涯を共にしたのでですからその父の人間離れして研ぎ澄まされた感覚とやらも決して侮れるものでもございません。

父と母が遊郭で出会ったなら私には父が酒を飲んだ時に母に芸妓の真似事をさせることも良く理解できます。父は間違いなく母を愛していましたけれどあまりそれを素直に表せぬ男でした。思えばああいう風に酒を飲み母に構うよう命令していたのは甘えていたのだらうと思います。

居間の隣の座敷で父はよく酒を飲んでいました。母は甲斐甲斐しく酒を運びたまに父が望む余興に付き合っていたのです。一度私はその様子を覗き見たことがありました。

着物に使う内揚げを目の周りにぐるぐると巻かれた母が父に琵琶を手渡されるのです。つまり父は言外に弾いてみせろといい、ばちを母に手渡します。「喜一さま、私が弾けないのをご存知でらっしゃいましょう」。母がそう言っても父は何も答えません。折れた母がやがて琵琶を奏で出すと父は面白そうな顔をして母を見ている。口先でおい下手くそと詰りながらも父は笑っているのです。おそらく母の手は少し小さいのでしょうか少なくとも苦しうに指を伸ばしながら弾いていた母が私は少しばかりかわいそうだと思っていました。

母の琵琶に飽きると父はもういいと遮り立ち上がって適当なところに座りなおしました。盃を起き右腕を右の膝に何度か叩きつけてぱんぱんと乾いた音を立てます。そして言うのです。「お

いで」。母はその場に琵琶とばちを置いて音を頼りに四つ這いで部屋を歩き出すのです。「阿呆
こちらだよ」、父の声を聞いては耳をそばだて恐る恐る四つ這いで歩く母は少女のようでした。
ようやく父のところまでたどり着くとまたここで父は意地悪をして母の手の甲をつねりあげます
。母が悲鳴をあげると父はまた「色気のない」と皮肉を吐き母を脇から抱え上げて膝の上に座ら
せるのです。そうして母に酒を飲ませます。私は彼らの遊興を覗いた罪悪感からかこの光景を鮮
やかに覚えております。

父が母の借金を吉原に払い母がようやく年季をあけさせたのは父と母が出会って二年後のことでした。おそらく軍人の薄給を、父はためにためたのでしょう。

当時の父の文が母の部屋に大切そうに残ってありました。中には母が認めたと思われる下書きもありそれを見ると母はかなり父のことを慕わしく思っていたようです。

喜一さま。吉原の淵のお歯黒溝を囲う桜が綺麗に咲いております。夕霧姐さまが私を花見祭りに誘ってくださいました。あの汚い溝を桜の薄紅色が美しく覆い尽くす様子をあなたにも見せて差し上げたかったけれど、軍人さまに情緒を差し上げるなら鉄砲玉やお米を差し上げた方が喜ばれることを鞠は重々承知しております。さて私はこの度夕霧姐さまのお計らいによりまして新造になることが決まりました。晴れて遊女の仲間入りでございます。今後は可能な限りたくさんのお客様と知り合い、太夫とも呼ばれる吉原一の遊女となれるよう精進してまいります。祝いの儀が御座いますゆえお手すきならばいらっしゃいませ。小鞠。

これに対する父の返事は、

此方では桜は散り初め。新造の件は待たれよと姉君に伝えていただきたい。近々参上する。飯野。

こんなものなのです。全く父も母もなんて強情で意地っ張りなのでしょうこんなにも情緒に欠く恋文を私は存じ上げません。母の文は皮肉にまみれていますし（とはいえ手元にあったのは全て下書きですから母がこれを父に送ったのかはわかりません）父はあまりにそっけなくとても女性に出すものとは思えません。しかしこれを後生大事にとり置いた母は間違いなくその、喜一さま、に惚れていたのでしょうか。そう思うと近々参上するというその小さな言葉がどれほど幼き日の母を喜ばせたか想像もつかぬほどです。

母は十五で落籍され父の元に身を寄せました。その後結婚するまで二年ほどは横浜の田舎に静かに住んでいたそうです。母はよくこの横浜暮らしを懐かしんでおりました。小さな家に住んでいて決して裕福ではないけれど毎日が楽しかったと。父はその話をするたび首をかしげましたあそこはどうも外人が多くて好かぬと。

やがて父は母と結婚しました。その時の写真が私の生家の居間に飾られています。結婚写真は普通両家の両親などを伴い写すことも多いものしかもたいていは将来にわたって残しても恥ずかしくないよう真顔で撮るものなのですが残念ながら私の両親の結婚写真は全く違うのです。彼らはたった二人で少しばかり奇妙な写真を撮っておりました。

父は軍服です。きっちりと前髪を上げ軍帽をかぶりいつも通りの厳つく冷徹な表情で立っております。しかしどことなく母の言動をはらはらと見守っている様子も感じられます一方の母はおそらくこれは白無垢でしょうかしかし角かくしはつけておりません。母は父の軍服の腕のあたりを掴み今にも笑い出しそうな顔でカメラなんて見ずに父を見つめているのです。直立して真正面を向く背の高い父とその父の腕を掴んで父の凛々しい顔を見上げる母。いったいこの世にこれほど可愛らしい愛おしい夫婦写真があるのでしょうか。

この写真の直後父は戦地へと出向き、そして二度と軍人として前線には立てないほどのひどい怪我を負って戻りました。左の腕は傷のせいで神経が途切れ、壊死を危惧した医者が独断で切り落としました。同じように右の足は、切断は免れたものの靭帯に大きな傷を負い父はそれ以降死ぬまで足を引きずって歩いたものです。父は退役の際お国からいただけるまとまったお金を手に

軍から退きました。私が生まれたのはちょうどその二年後のことです。私を産んだ時母は十九父は三十三でした。

その空白の二年間について母はあまり語ろうとしませんでした。おそらくその二年は軍学校を卒業し国のために生きてきた父にとって恐ろしいほどの恥辱だったことでしょう。母はその隣で静かに父を見守っていたのだと思います。

幼い頃私はよく母に甘え風呂と一緒に入っていました。その時にいやでも母の体についた大小さまざまな傷跡が目に入ったことを覚えています中でも母のなだらかな乳房の上鎖骨の真下に入った大きな切り傷の後は私を驚かせました。いいえ決して怯えたわけではないのです。その切り傷を覆うように湯に浸かった母の白い肌は花が咲いたように赤くなりました、父はあの美しさを知っていたのでしょうか。幼い私は尋ねました。母様これはどうなされたのですかと。母は笑って答えました。「これはね、お父様が一番お辛かった時、それを私に分けてくださった分なのよ。お母様のこれはね、お父様とお揃いで持っているの」。

小さな私には意味がわかりませんでしたがおそらく父は母を。人生を奪われたものの憂さなど私には想像もできませんがしかしあの父ならばやりかねないと思います。なぜ母がそんな理不尽に耐えたのかそこには永遠に近い謎がありおそらく私には死ぬまで分かることはないのでしょう。

私が生まれたのは飯野家にどうしようもない停滞と憂鬱が渦巻いていた頃でした。私は私自身がこの家の一筋の光になりえたかと言われれば首を横に振らざるをえません。

しかし可愛がられたかそうでないかと言われれば私はとてもとても愛情を持って育てられました。やはりいかに冷徹な人でもいかに憂鬱が心を支配していても父は自らと愛する女性の血を分けた生き物を愛さざるを得なかったようです。私は母に瓜二つでした。その私を父はいったいどうして愛さないことができますでしょうか。私はいつも私の眠る姿を愛おしそうに見つめおっかなびっくり手を出して頬を撫でる父を眠ったふりをして待っていました。父が子守は向かんよと呟き部屋から出て行くとお母様は私をそっと抱きしめ私の耳朶に接吻してくださるのです。そしてよく私と母は笑いあったものです。「今日もうまく騙せましたね」「でも、父さま、気づいているのではないかしら、気づいて出ていかれたのかしら」「喜一様はね、そんな器用なお人じゃないのよ、さ、お眠り、いい子」。私は父と母の血両方を受け継ぐものとして受け取り得る全ての愛情を受け取りました。しかしその愛情とは少なくとも私の血に向けられたものであって私に向けられたものではないのかもしれないと今は時々恨めしい気持ちで思い出します。

さて。母はかなり強気な女性でした。正直に言うと私は父が怖かったのです。なぜ私が父を恐れたかは後述いたしますが私でなくとも父は人をすくみ上がらせてしまうような容姿をしていました。何より左の腕の部分の服が風になびいてしまうこと、びっこを引いた歩き方は戦地で苦境をくぐり抜けたことを誰であれ感づきましたし何よりも父の目です。親族の立場からこういうのは気が引けますが父の目はまるで蛇のようでじろりと目線が合おうものならそらさずにはおられませんでした。母はそんな父に物を申せる数少ない人間だったことでしょう。

私が四つの頃だか五つの頃だか。とにかく父が退役して幾許か経った頃です。私の家に部下を数名引き連れた位の高そうな軍人様がお出でになりました。どうやらそれは父の元直属の上司で

ある閣下らしく父はその表情の乏しい顔に驚きを浮かべ母は少しだけ嫌そうな顔で軍人様を出迎えました。お名前は佐々木さまと仰います。佐々木さまは一時間ほどお出ましになりすぐに帰って行かれました。父は終始困惑したような恐縮したような面持ちでした。

「どう思った鞠」。父がそんな風に母に尋ねたのは佐々木さまがお帰りあそばしてしばらく経ってからでした。「どうもこうも光栄じゃございませんの」「光栄があるか。俺は軍に骸骨を乞うた身だぞ。指令など想像したこともない。前線で死んだものらにどう顔立てができる」「尻尾を巻いてこんな田舎にお逃げになっているよりよろしいわ」「無礼者が愚弄する気か」「貴方にご無礼申し上げられるのは私くらいだから丁度宜しいのじゃございませんかしら」。幼い私にも父と母の言い争いの内容が少しばかり分かりました。父は尻込みをされていて母は背中を押そうとしている。押し問答を繰り返したのちに母がはたと立ち上がって父にきっぱりと言い切りました。「もう鞠はこのお話は飽きました」。一体それはどんな魔法の言葉だったのでしょうか。父は次の日には佐々木さまに手紙を書き軍部司令官を志願しました。後々知ったのですが父はこの時の手紙に私の身に何かあった時の保護と監督を重ね重ね重ね連ねていたそうです。

如此いたしまして父は軍部へ復帰しました。つまりそれは私の極めて歪んだ生活の始まりでもありました。

私が女学校に上がることになった年ですから七つの頃。新しい世界を夢見て浮き足立つ私に父は静かに言いました。「女学校には行かないで宜しい」。私はたいそう驚いて父に理由を尋ねました。父はただ「読み書きなら鞆に習いなさい。御前は外に出て行く必要はない」と答えるばかりでした。私は母に助けを求めましたが母はいまひとつ状況がわかっていない様子でございました。思えば母も女学校など通ったことはなかったのです。もしも私が父を恨むとすればこの後の数年間が大きく影響していることは間違いもございません。

私の部屋は家の一番奥の物置のような小さくて窓もない部屋でした。日も当たらずあるのは寝台と、おもちゃでぎっしり埋められた棚だけです。私はこの部屋から、父がいない間に出ることは絶対に許されませんでした。私が所望すれば母は大方のものは買ってきてくれましたし父は夕刻勤務から戻ると必ず私の部屋にやってきて大きな鞆に詰めた本だとかおもちゃだとかを私の部屋の棚に並べてくれました。

母はいつも部屋で私に本を読んでもらいました。私は読み書きの手ほどきを母から受けました。時には茶道や華道や書道なんかも母から習いました。私は幾度となく外に出たいと母に請願した記憶があります。しかし母は困った顔をするばかりでした。

ただ一度だけ母が私を連れ出してくださったことがありました。たしかそれは私のあの暗い部屋で過ごした二年目の誕生日のことだったと思います。大雨の日です。傘をさして私と母は出かけました。周りはひどい雨で私は何を見たのか何があったのか正確には覚えておりません。でも外の空気を吸ったことが嬉しくて幸せでかあさまかあさまと何度も声を張り上げたことを覚えております。しかしああ誕生日だったからでしょうか。びしょ濡れで戻った私たちを父は家で待っていました。「部屋に戻りなさい」と私を見て父が一言、私は逃げるようにして奥の暗い部屋へと駆けていきました。遠くで高く肉を打つ音が聞こえました。それ以来私は部屋の外へ出ることを諦めました。

私の骨と筋肉はこの暗い部屋の中で過ごした数年間ですっかり弱くなり十五になる頃にはもはや自立できないほどでした。さらにまともな視力も失いました。私が父と母を恨んでいると思いますでしょうか。いいえそんなことは決してないのです。私に取っても何不自由ない暗室での生活は当たり前となりました。私を学校へやらない代わりに父は美しい着物や海外のおもちゃをこっそりと持ってきては私に下さいました。私の部屋はいつも美しいもので囲まれていました。時に父の機嫌がいい時私たち家族は私の布団で三人で寝そべり押し合いながら眠りました。

今でも部屋にやってきた母が壊れそうな美しいビイドロをぽぺんぽぺんと音を立てて吹く音が耳に蘇り私はたまらない気持ちになります。記憶の中の母はいつまでも若く私の体は小さいままでした。ああ私は間違いなく世界で一番幸せな子供時代を過ごしたでしょう。私を知るものも友の一人もないことを除けば。父は時間を閉じ込めておきたかったのでしょうか。誰よりも幻想の中に生きている人でした。こんな私を可笑しいと思うのでしょうか。いいえ、おかしくはないのです。私は愛されていました。母がいつも共にあり父は不器用に愛情を伝えてくださいました。体に残ったのは透き通るような白い肌と退化して薄茶色になった美しい瞳。一人では歩けぬひ弱な足と様々な本から得た教養。それ以上に何を望みましょうか。

もしかしたら父が閉じ込めたかったのは私ではなかったのかもしれませんが。私が父を恨むとしたらその私の仮説が父の口によって真実だと伝えられたその瞬間だけでございましょう。

私の暗室での生活は唐突に終わりを告げました。父が軍を二度目に退役したその日です。父は私に車椅子を買っていらっやいました。当時にしたらおそらく高級というほどでは効かなかったようなものでしょう。驚くほど柔らかい座面としなやかに動く車輪。父が私を抱き上げ椅子に座らせ部屋から押し出して庭へ連れて行ってくださったあの瞬間を私は生涯のうちの最も幸福な瞬間として数え続けるでしょう。雨上がりの庭は水滴がきらきらと夕日に反射してそれはそれは美しかったものです。目が悪い私にはその光の粒らがぼやけた不思議な光を放つ美しいものに見えました。隣に座る父と母は結婚写真のまま美しいままの姿でした。

二度目の正直の退役後父と母と私の暮らしは極めて穏やかでした。父はよく窓際に腰掛けて庭を眺めながら、煙管をぶかぶかと吸っていました。片手で本をぺらぺらとめくり酒を煽りまるでいつだかの文豪のように父は穏やかな暮らしを楽しんでいるようでした。母はその父に寄り添い何も言わずにそこにおりました。

父が他界したのは退役の直後でした。これも後から調べわかったことなのですが父が軍を再び退役したのは彼の病気がわかったからなのだそうです。父は最後の瞬間まで母といることを選びました。暗室に住んでいた私は父の体調の変化を知る由もなく退役から一呼吸を置く間もなく父が亡くなった時は途方にくれました。

ある朝母が目覚めると隣に眠っていた父がしっかりと母の手を握っていたそうです。その手を握り返して母は気づきました。ああ喜一さまはもう。と。母は噎び泣きました。私は涙を流すこともできませんでした。父の穏やかなちようど窓のそばで本を片手にうたた寝をしているような表情の死に顔にすがりつき抱きつき母は叫び続けました。その叫びが止む前に私は佐々木さまにご連絡を差し上げました。当時私が親交のあったのはあの夫妻しかなかったのです。

佐々木さまがいらしても母は父の体から離れようとしませんでした。火葬場に連れて行くなら私も一緒に燃やしてくれと母は叫びました。私は母がここまで父を愛しているとは知らなかったのです。身を切るような泣き声によじれるような叫び。愛するもののなかった私にはその痛みが分かりませんでした。

父は葬儀を上げませんでした。母がそれを頑なに拒んだのです。ただ私と母だけで火葬場に出向き父の亡骸が燃えるさまを見ていました。母は灰になった父を見てももう泣きませんでした。その灰を母はひとつまみ海に巻きひとつまみは家の裏のイチョウの木の根元に蒔きました。佐々木さまのご厚意で私は“母の悲しみが収まるまで”、佐々木さまのお家に身を寄せました。その日は永遠にこなかったのですけれど。

晩年の母は目も当てられないほどでした。いつも赤味のさしていたあの頬はこげやつれ涙も枯れてしまったのでしょう、雨が降れば外へ出て嘆きイチョウの木が葉をつければそれを見上げて泣きました。私は時の経過とともに父の死を受け入れました。たくさん残してくれたおもちゃ屋家で父がいつも大切そうに磨いていた勲章が私にとっての父の証拠でした。しかし母にはそうではなかったのでしょうか。

季節が一回りした頃母はなくなりました。父と同じ病でした。それもそのはず母はずっと父のそばにいたのです。同じ病気をもらっても何ら不思議ではありませんいえそれは母が望んだことなのかもしれません。同じ喜びと同じ苦しみを分け合うことこそが彼らの完成された幸せであって父の死に目に時母が嘆いた理由は、愛するものを失った悲しみではなくおそらく父に置いて行かれた悲しみだったのでしょうか。なぜ一緒に死なせてくださらなかったの。なぜ連れて行ってくださらなかったの。ええ母はそういう人でした。

私のお父様とお母様のお話はここまでです。きっと私のおよびもつかないように彼らは愛し合っていたでしょうしその裏にどのような睦言が交わされたかは娘の私でさえも踏み込めぬ神聖な領域です。今だから私はこのように書けるのです。幼い頃の記憶たちは全て静かな靄に包まれていてそれが美しくもあり焦ったくもあります。これは私の物語ではありませんから父と母が死んだ時の悲しみを私が述べることは致しませんがおそらくここまで読んでくださった方にはこの悲

しみと不思議な恍惚感を理解していただけたのではないのでしょうか。

その後の私の話に少しでも触れるなら私は佐々木さまのお家の養女になりました。しかしお家でお世話になったのはたった一年か二年のことで私はすぐに佐々木さまのご紹介の男性と籍を入れることを決めました。結婚相手の男性は父とは正反対の男です。真面目で誠実でありその分情熱には欠けますが信用に足る相手です。私の腹には今子どもがおります。私の父と母の血を継いだ子どもが。

私はこの前の折に佐々木さまへのご挨拶を兼ね生家に戻りました。父の書斎にはまだ父が住んでいるかのようにでしたし私の部屋では母がビイドロを鳴らす音が聞こえてくるようです。居間に飾ってあった父と母の結婚写真を見た時私は感情を抑えることができませんでした。不安げに母の方を見ようとするのにそれでも生真面目さゆえカメラから目を離せぬ精悍な顔立ちの父。その腕にしがみ付き顔を見上げ幸せでたまらないといった笑顔をこぼす母。

父の声。母の笑顔。着物の裾、軍服の勲章がかちやりことなる音。紫煙の香り父が買ってきたブリキのうさぎ、三人で眠ったお布団。

私は私のお腹の中の子どもが父と母のような気がしてなりません。本来混ざりあえないはずのふたつの人が娘という私を介して一つにつながって生まれ直してくるのではないかという気すらします。もちろんそんなのは幻想わかっております。わかっているのです。

ただ愛し合って死んだ彼らがどうか幸せにそして私のそばにあり続けて欲しいと私は願うばかりです。